

市井(しせい)

井戸「水」のある処に集落が形成された故に、市井と称された。

昭和20年代、私の生家の向かいには、日本酒・味噌をつくる小さな工場があった。西日がきつくと、七つ時(16時頃)ともなると暑さしのぎに三々五々の工場の日陰に集い、筵の上にたむろし他愛もない語らいを楽しんでいた。政治から漁・稲の様子、戦争の話が主題であったような気がする。今となるとこの近所付き合いの風景が、妙に豊かさを感じ、幸せだったのではないかと確信に似たものを持つようになっている。

毎朝リヤカーに待屋敷跡の井戸から木樽2つを運んで来る酒造工場、豆腐屋は湯気と油揚げの匂いを放ち、隣の網元では夏網の魚を馬車で運んで、板場に広げ、魚行商や近所の主婦がボウルを持つて集まった。裏の広場では野球少年が投げ、打ち、走り、若では子どもたちが自転車のリムを竹棒で器用に操作しながら走り、女子はゴムひもを飛び、道路はチョークの輪でいっぱい。決して経済的には豊かではなかったはずなのに、最近、あの心根、あのエネルギーな市井の喧騒を思い出して、現在とつい比較してしまう。

「時」は酷いと感じることがある。戦後70年。私も10月で70歳となるが、超電導、分散型エネルギーと追い続けながら、あの頃停電に文句を言わずにランプを磨いた市民のDNAこそ慈しんでいきたい。

市長5期目にあたり、ふと思いついた一景を。
(市長)

広告